

川原寺出土の渦文埴

1957年におこなわれた川原寺の第1次調査において、東回廊南端東側の包含層から出土した緑釉水波文埴は、わが国における施釉技術の開始をつける資料のひとつとして知られている。この時の調査で出土した、もう1片の文様埴について報告する。

渦文埴の観察 塔に直面する東回廊の南から5間目の基壇付近から出土したものである。10.5cm×6.5cm程の破片で、各辺の全長を知ることはできないが、2辺は直角に交わり方埴とみてよい。厚さは縁辺で1.1cm、中央に向かって次第に厚みを増す。側縁はほぼ垂直になり、断面が梯形をなすものではない。胎土は乳白色を呈し、精良。やや軟質の焼き上がりである。本来緑釉が施されていたものと考えられるが、剥落が著しく確認できない。表面の渦文は、幅2mm、深さ1mm前後、断面U字状の沈線で4条の同心円弧を描く。裏面は図の左右方向に軽いケズリを加え、側縁に沿って狭い面取りをおこなう。釘穴等の穿孔、刻書・墨書は認められない。

川原寺の緑釉埴 川原寺で使用されていた緑釉埴には、大きく二者がある。ひとつは冒頭に述べたもので、厚さ1.5cm、表面に半肉彫りで水波文を表す。類例は1973年の東大門の調査においても出土している。素地は砂粒を含む粗雑なもので、表面から側面にかけて施釉をおこない、裏面には製作時の布圧痕を残す。

他方は、1974年の川原寺裏山遺跡の調査で、火中した塑像・埴仏等とともに、大小30点近くがまとまって出土したもので、大きさのわかるものは縦15.5cm、横25.0cm、厚さ1.2cmをはかる。素地はきわめて精良で白色を呈し、繊細な沈線で静かな水波文を表現したものと、太いヘラ描沈線で渦文と波の泡立つ様子を表現したものがある。裏面に布圧痕はなく、素面で軽いケズリを側縁の方向に平行に加えている。施釉は、前者と同様表面および側面におこない、裏面に及ぶものもある。素地の表面にえぐり込みを設け、施釉・焼成後、その窪みの中に漆喰を塗り込めた箇所がいくつかみられる。また、縁辺に釘穴をもつものがある。

これらの裏面には「八」（川原寺）「第十一□三」「八大」「中」（川原寺裏山）といった刻書・墨書がみえ、堂内の壁面もしくは須弥壇を荘厳した際の番付と考えられている。同一個体に、刻書と墨書でそれぞれ異なる内容を記したのもあるため、こうした記載には製作時・使用時など複数の文脈のあったことがうかがわれる（奈良国立博物館『飛鳥の埴仏と塑像』1976年、8頁 図版17）。

まとめ これまで寺域内からは、半肉彫りの水波文埴の出土しか知られていなかった。今回報告した渦文埴は、胎土・形状・製作技術などの特徴から、川原寺裏山遺跡出土の緑釉渦文埴と同一のものである。裏山遺跡に埋納された遺物が、本来いずれの堂塔に属するものであったのかを推定する手がかりとなろう。

（次山 淳／飛鳥資料館）